

Jean-Claude Bouvier et Claude Martel.

La langue d'oc telle qu'on la parle : Atlas linguistique de la Provence

Forcalquier : Les Alpes de Lumière, 2016, xii+321pp.

鈴木 博之

1 本書の構成

本書は、プロヴァンス語（本書の名称に従えばプロヴァンス地方のオック語¹）の言語地図集である。より正確に言えば、プロヴァンス地方とドフィネ地方のプロヴァンス語を扱っている。タイトルこそ違えど、同じ著者らによる *Atlas linguistique et ethnographique de la Provence* (Bouvier et Martel 1975, 1979, 1986) に続く第4巻に位置づけられる。第3巻が出版されて以来、30年が経過しての出版となった。先立つ3巻にある表題のうち、*Atlas linguistique de la Provence* の部分が本書の副題となっているのは興味深い。著者としても、本書の位置づけを先の作品の第4巻かつ最終巻にしようという意図があることが、序文 (p. iii) からうかがえる。

本書の本体部分には、「住まい」「家具」「家事」「水回り」「衣服」「家族」「人体」「宗教」の計8つの意味分野の語彙形式と言語地図が収録されている。言語地図には見出し語に基づいて通し番号が振られ、本書は ALP²1061 から ALP1358 までの計298枚が収録されているかと思えば、そのうち9種には他と共通するフォーマットの地図がない。この地図には最大で170地点 (pp. vi-vii) の言語資料が収録されている。また、この通し番号の地図とは別個に、12種類の解釈地図が Fig. として番号づけられて収録されている。各地図には、数行の特に語源に関する簡潔な解説があるものが多いが、すべてではない。また、地図は付されないが、方言形式を単に地点番号とともに示した見出し語も収録されており、両見出し語の総合索引は本文に先立ち pp. x-xii に掲載され、検索に便利である。

¹この名称については、Sibille (2003) 参照。著者は書名に *langue d'oc* という呼称を用いているが、何を言語と呼ぶかは一義的に決まらない。フランス語では *occitan* や *provençal* という名称もある。本書の対象地域がプロヴァンス地方に限られ、またその下位方言分類にも話題が及ぶため、本書評ではプロヴァンス語と呼んであいまいさを回避する。評者の考えに近いものに、lexilogos の記述・分類がある：https://www.lexilogos.com/oc_langues.htm

²*Atlas linguistique de la Provence* の略。

2 本書の出版意義について

評者が書店で本書を手にとった根本的な理由はその書名にあった。*La langue d'oc telle qu'on la parle* と、最後の動詞「話す」が現在形になっているのが気になった。それはプロヴァンスに暮らしたことがあり、曲がりなりにも同地域でプロヴァンス語の方言調査を行おうとした経験がある評者が見れば意外としか言えなかったからである。しかし、評者が抱く疑問のほとんどは、著者が簡潔かつ的確に序の中で述べている (pp. iii-v)。

評者は本書の地点番号 143 の付近に 2 年間暮らし、地点番号 77 の村に計 2 か月ほど滞在したことがある。その間、本書に含まれる約 3 分の 1 の地点を訪れた経験があり、そのすべての地点でプロヴァンス語の母語話者に出会えたことはなかった。プロヴァンス語の母語話者が極端に少数であることは、著者も記述している (p. iii)。著者は、本書の出版に先立ち、2015 年に方言資料のクロスチェックと補完のために調査を行おうとしていたが、地点によっては母語話者がもはや存在しないまたは見つけるのが非常に困難であったことを述べている。より完全に近い地図を読者に提供したいという著者の希望も理解できないわけではないが、先の巻が出版されて 30 年が経とうとしているときに方言資料のチェックを行うことは、たとえ資料が得られたとしても世代差が出てしまうのではないかと危惧される。しかしこの過程によって、著者はプロヴァンス語の特定の方言については、消滅に瀕していることを認知するに至ったといえる。

プロヴァンス語は危機言語である。現在、本書と同様のプロヴァンス語の調査を企画すれば、不可能である³。それゆえ、本書の言語地図が示すのは、基本的に先の 3 巻の出版時に収集した時代の資料に基づいた、その時点の言語状況であることには注意が必要である。それでもなお著者が書名に「話す」という動詞を現在形で用いているのは、著者も記述している (p. v) ように、プロヴァンス語は死語ではなく、かつ活きた遺産であるからである⁴。簡潔な記述であるが、評者が抱いた疑問に答えている。このように疑問に思う読者が存在するだろうと著者は読んでいたのだろう。

しかし気をつけておきたいのは、プロヴァンス語の話者の減少および村レベルでの方言の消滅は、単に言語がフランス語に置き換わったためではないという点である。プロヴァンス地方によく認められる事例であるが、村落が一度廃村になったのち、地域外の人々が村ごと不動産として取得し、村落の外観を残しつつ移民として

³地点番号 77 の村に居住するフランス人言語学者によると、この 30 年同村でプロヴァンス語を耳にしたことはないという。

⁴フランス語の文法においては、話し手が存在する限り、ここでの「話す」という動詞に過去類の時制を用いることはできないという論理もある。

生活するパターンがある。この場合、言語文化は断絶していることになる。たとえば、センサスなどの人口資料では人口の増減がたいして認められなくても、土地の言語文化が消滅していることがあるのである。いずれにせよ、プロヴァンス語の地理言語学的調査の継続は困難を極めることになるだろう。その点で、本書は特定の時代におけるプロヴァンス語諸方言の実態を記録するものとして重要な位置を占めるのは確実である。

本書はそもそも CNRS（国立科学研究センター）のプロジェクトとして企画され、分冊の出版途上で企画が消滅し出版ができなかった経緯がある。それゆえに、本書の地図作成範囲が固定され、地理的な意味でのプロヴァンスに限られるというのは致し方ないことである。しかし、地理区画上のプロヴァンスはプロヴァンス語の分布地域には一致しない。このため、本書でも記述がある (p. iii) ように、プロヴァンス語全体の分布について調べるのであれば、本書とともにラングドック地方（プロヴァンスの西側）の言語地図とイタリアのピエモンテ地方⁵（プロヴァンスの東側）の言語地図を合わせて参照しなければならない。仕方のないことではあるが、地域を基準にした言語地図というのはこのような問題が生じるものであるということが理解できる。

一方で、著者は本書の地図上に示される調査地点の選定方法について説明していない。地点の分布を見渡す限り、人口密度⁶を考慮せず、地域全体を見て隣接する各2地点間の距離に大きな差が出ないように選んでいるように見える。調査当時の村落の分布を考慮してのことかもしれないが、各地域の歴史が考慮されたかどうかは気になる点である⁷。著者は本書においてこの点について簡単にでも説明をしておけば、本書を独立した書物として見たときに役立ったであろう。

本書の方針は、序 (pp. iii-v) にあるとおり、先の3巻を引き継ぐ点もあれば、改良した部分もある。継続する特長として、扱う地理的範囲、語義分類による提示、音表記の厳密さ、図の挿入をあげる。特に最後の図の挿入については、特筆に値する。言語形式と指示対象を明らかにしておくことは、言語学的に精密かつ重要であるだけでなく、地方文化の記録も兼ねる。先の3巻のタイトルに *ethnographique* 「民族誌学的」という単語が含まれていることから考えると、本書においても著者はこの点を特に意識していることがうかがえる。本書はオールカラーであるから、その価値

⁵ 評者はピエモンテ地方においてプロヴァンス語が日常的に話されている実態を確認した。また、同地のプロヴァンス語とイタリア語の対照辞典も存在する (Lamuella e Pellerino red. 2008)。

⁶ 正確には村落密度と言うべきであろう。都市部の人口密度は高いが移民も多く、地域方言の研究において都市部を考慮しないのは通例である。

⁷ たとえば、地点番号 77 と 60 の間には、城跡がある村 Colmars-les-Alpes があり、同地において重要な役割があった過去がある。ただし、本書のための調査地点には選ばれていない。

が十分に発揮されている。

改良した点として、出版物のサイズと地図の電子処理、および解釈の内容をあげる。本書は A4 判で紙質もよいため重量があるが、先の 3 巻がさらに大きい判を使用していることを考えると、読みやすさが格段に向上していると言ってよい。本書では、すべての地図をコンピューター処理しており、それを実現したニース大学の Guylaine Brun-Trigaud が表紙や裏表紙見返しの著者一覧に名を連ねている。彼女の貢献が本書においていかに大きいものであったかがうかがえる。また、本書の解説は簡潔なものにとどめ、特にプロヴァンス語の言語データ（一次資料）それ自体に関しては、すでにオンラインで公開されている *Thesaurus occitan*⁸ を参照するようにと述べる (p. iii) など、既存のデータベースと結合させることで、本書の記述容量を一定程度減らす工夫が見られる。

先述のように、本書は CNRS によって企画されたフランス言語地図のプロヴァンス地域の方言についての最後の分冊と位置づけられる。ただし、CNRS が企画を消滅させ、資料はあるのに言語地図集が完成することはなかった。この最後の 1 冊を、地図の電子化やインターネット上の資源との連携などを模索し、著者自らが設立した団体 (Les Alpes de Lumière) を通じて資金を集め、かつ最終的に印刷・出版した著者の労力は称賛に値する。

3 本書の地図と解釈に関する検討

本書で ALP の通し番号がついている地図は、あらかじめ県境と河川と地点番号が示された白地図に、原則として各地点に音標文字による音形式を直接書き込む形式を取っている。これは、フランス言語地図という CNRS のプロジェクトを構成する一部であると考えられ、フランス国内の他地域の言語地図に見られる記述方法と共通する。加えて、語形が長い場合は適宜記号を用い、地図中には記号で示し、地図の外に凡例を記述するパターンのほか、連続する地域で同一の音形が広く認められる場合は、その音形を巨大な文字で示し、例外となる地点に別途音標文字を添えて示す事例もある。

地図を利用するにあたり当惑したのが、地点番号の振り方である。全体的に見て、地域ごとに北から南へと数が大きくなっているが、1 地域内での地点番号が地理的連続によらない場合がある。番号と地名の対照表は pp. vi-vii にあるが、ある程度本書の記述に慣れたうえで、地名を記憶しなければ使いづらい面があるのは事実である。

⁸<http://thesaurus.unice.fr/index.html>

先述のように、本書は地図に音標文字を用いた具体的な音形を書き込む形式を採用しているが、本書に先立つ3巻の地図集が Rousselot-Gilliéron 式⁹というフランス語方言学に特化した音標文字を採用しているのに対し、本書は国際音標文字 (IPA¹⁰) を採用している点で、可読性が向上している。ただし、両者の対応関係を示す p. viii における解説には疑問が多い。国際音標文字の定義と、発音方法の解説が合わないものが散見される点は残念である。地図上の言語データを読むにあたって特に注意が必要になってくる音標文字がいくつかある。まずは、**R** と **B** が表す音である。序における解説 (p. viii) に従うと、**R** は「現代フランス語の軟口蓋 r 音」とし、**B** は「喉頭部（喉の奥）における r 音」とする。この記述を見れば、用語を厳格に用いていないと理解できる。実際のところ、評者は市販の教材 (Blanchet 2010, Quint 2014) を除いてプロヴァンス地方のプロヴァンス語方言を実際に耳にしたことがないため、この記述の精確性については判断のしようがないが、現代フランス語の標準発音であるという前提で理解するならば、本書の **R** は有声口蓋垂摩擦音 [ʀ] である。このように考えると、本書の **B** が何を表すかは非常に疑問で、推察するならば有声咽頭摩擦音であろうか。実際の音声が開示されていないのは残念である。また、鼻母音と非鼻母音の中間状態を表すために、たとえば **a** について **aⁿ** という表記を行う¹¹。この特徴を書き分けようとする意図は評価できるが、**a** というのは IPA であればきしみ音を表すものであるので、本書の原則を知らなければ紛らわしい表記法の1つである。そもそも、このような表記を IPA と呼ぶのは誤りであるから、著者が標記の厳密さを強調しても (pp. iii-iv)、その信頼性は疑われる。

次に、本書の中心部分である言語地図とその解説について見る。ここで、本書の中から2ページ分の記述を例に、著者の記述を検討してみたい。まず p. 6 について見る。このページには、「城」という1語について地図 (ALP 1063)、2種類の解説、写真およびその解説が収められている。この地図には、大きいフォントで複数の地点をまとめて表すという方法が用いられている。地点番号のそばに語形が記載されていない場合は大きいフォントで示される形式をとるということを理解しておく必要がある。語形を得られなかった地点には専用の記号があてられ、空白にはなっていないのが本書の地図の特色である。本書で採用されている方法は合理的ではあるが、必ずしも見やすいわけではない。慎重に地図を読みこむ必要がある。この語については、語源的には1つの形式から派生しているが、地図の対象地域の南半分は多

⁹Gilliéron et Rousselot (1887) 参照。

¹⁰本書はフランス語で書かれているので、API (Alphabet phonétique international) と呼ばれる。

¹¹この上つきの **n** の部分は、例によって **m** や **ɹ** もあるため、鼻音部分の調音位置を示している。

くが同じ音形式になるのに対し、北半分は細かく地点ごとに微細な音形の差異が認められる。分布地域が山地であり、相互の交流が少ないことが見込まれる地域では音形の分岐が激しいのであろう。南北を分かつもっとも際立つ特徴が初頭子音が/k/か/tʃ/かという点であることが解説されている。また、東端とそれ以外を分かつ特徴が語末における/l/を留保しているかどうか¹²であることも述べられている。このように、地図の解説は音形の変化と分布の簡潔な記述で構成される。また、本ページの写真も重要である。プロヴァンス語における「城」の意味範疇には、大きい邸宅も含まれることが分かる。必ずしもフランス語の見出し語 *château*（そして和訳の「城」）から想像しうるであろう事物とは一致しないことを注意喚起するとともに、読者に分かりやすく提示しているという点に本書の大きな価値を認めることができる。

次に、p. 188 について見る。このページには「姓」と「祖先」の2語が収められており、前者は地図と解説 (ALP 1221) が掲載され、後者は語形の一覧表のみが掲載されている。「姓」の語彙形式は多くの地点で共通の形式からの派生すなわち音形式の差異が認められるが、「祖先」の語彙形式は10種類程度の異なる語彙形式が認められ、それぞれに音形式の違いが認められる。それぞれの語彙形式はローマ字順に並べられ、語形に続いて地点番号が記される。この情報を丁寧に拾えば、読者が資料に基づいて言語地図を作成することも可能である¹³。言語地図は一様分布であっては興味をそそるものにならないため、地図化するならば、「姓」よりも「祖先」のほうが面白いはずである。地図化する項目については、言語事実に基づいて決定されたのではなく、先に項目が指定されていたのかもしれない。

本書の解釈地図は、ほぼ語源の異なりをまとめて記号で標示するものである。等語線は引かれていない。著者としては、本書は解釈地図集ではなく資料としての言語地図集ととらえているため、まとめの意味で適宜挿入されている解釈地図は、読者に分かりやすく方言特徴の分布を効果的に提示するものと理解できる。なお、本書に含まれる地図全体を通して見た場合に認められる方言間の差異について、著者は序 (pp. iv-v) において簡潔に指摘している。

プロヴァンス語には、通常4つの方言区画があるとされる。ローヌ河畔 (rhodanien) 方言、山手 (alpin) 方言、海手 (maritime) 方言、そしてニース (nissart) 方言¹⁴である。本地図集の資料が示すのは、まず山手と海手の差異が顕著で、ローヌ河畔方言の位置づけが音形式と語彙形式から見れば、特に独立した方言区画をなすように見えな

¹²ラテン語 *castellum* に由来し、語幹末には1がある。

¹³本書には地点名の一覧がある。また、言語データには地点番号が付されている。これらの情報を用いて、たとえば ArcGIS online などを用いて処理できる形式に整理し、言語地図を作成することができる。

¹⁴ニース方言については、Gasiglia (1984) を参照。

いという点である。おそらく同方言は、言語地図で取り上げられない特徴において異なる特徴を見せるのであろう。そもそも言語地図は方言区画を示すためだけに作成されるわけではないのであるから、本書の結果をローヌ河畔方言という区分の存在を支持しない根拠とするのは誤りとなる。この点には気をつけたい。

4 まとめ

本書は危機言語の言語地図集として示唆に富む点が2つある。地点ごとに言語データそのものを表示している点、そして豊富な文化語彙の写真つき解説である。いずれも資料的価値という観点から歓迎されるものである。一方で、使用する音標文字の精確性については慎重な記号の選択と音声学的な解説が必要であった点も指摘しておきたい。後世に残る資料として、誤解のない記述方法を慎重に選択するほうが望ましいだろう。

また、本書は解釈地図を12種類提示するにとどまっている。今後は読者が本書の提供する資料を読みこんで、解釈するという作業が期待される¹⁵。本書の地図には交通路が記載されていない。これは解釈に取り組むにあたって重要な問題となる。現地の人文地理に関する資料を併せて参照する必要があるのはもちろん、場合によっては実際に土地を歩いて交通路や人の往来についてフィールドワークを行う必要もある。加えて、本書にちりばめられた写真は、フィールドワークにおいて役立つ資料になるだろう。本書のような出版物は、今後言語地図集を企画・作成・出版するうえで、参考にする価値が十分ある。

参考文献

- Blanchet, Philippe (2010) *Parle-moi provençal*. Chennevières-sur-Marne : Assimil.
- Bouvier, Jean-Claude et Claude Martel (1975, 1979, 1986) *Atlas linguistique et ethnographique de la Provence*, vols 1-3. Paris : Édition de CNRS.
- Gasiglia, Rémy (1984) *Grammaire du nissart : essai de description d'un dialecte d'oc*. Nice : Institut d'études niçoises.
- Gilliéron, Jules et Abbé (Jean-Pierre) Rousselot (1887) *Revue des patois gallo-romans*. Paris : H. Champion.

¹⁵フランス言語地図の成果を用いて地理言語学的研究を行っているものに、Kawaguchi (2020) などがある。

- Kawaguchi, Yuji (2020) Standardization and distance: A case study of the linguistic atlas of Champagne and Brie (ALCB). In Yoshiyuki Asahi (ed.) *Proceedings of Methods XVI: Papers from the sixteenth International Conference on Methods in Dialectology, 2017*, 269-276. Berlin: Peter Lang.
- Lamuela, Xavier e Rosella Pellerino (red.) (2008) *Dizionario italiano-occitano occitano-italiano: Norme ortografiche, scelte morfologiche e vocabolario dell'Occitano Alpino orientale*. Cuneo : Più Eventi Edizioni.
- Quint, Nicolas (2014) *L'Occitan*. Chennevières-sur-Marne : Assimil.
- Sibille, Jean (2003) L'occitan ou *langue d'oc*. Dans Michel Alessio et Jean Sibille (réd) *Les langues de France*, 173-190. Paris : Presses Universitaires de France.

受領日 2020年6月25日
受理日 2020年8月6日